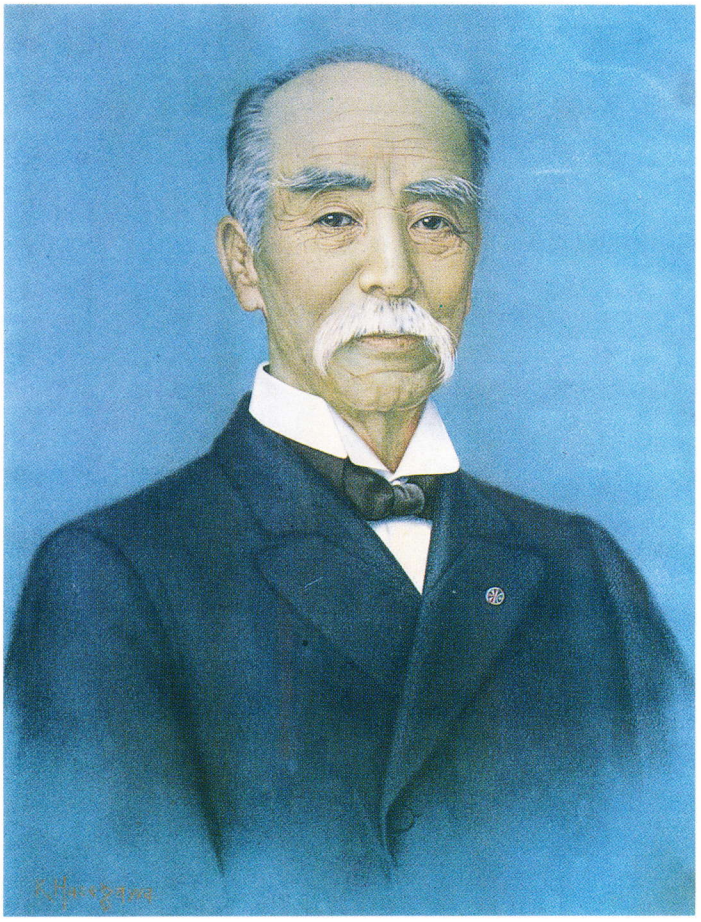
沼津市
明治史料館通信

1992. 4. 25（季刊 年4回発行）Vol.8 No.1　通巻第29号

江原素六。生誕150年記念

今年一九九二年は、江原素六生誕一五〇周年にあたり、記念事業が行われます。



江原素六肖像

■江原素六生誕150年記念式典
7月19日(日)
午後1時30分～3時35分
於　ブケ東海

■明治史料館企画展
江原素六とその時代
7月1日(水)～8月30日(日)

どなたでもお気軽に御参加下さい。

＊7月19日は無料開館日

江原素六とその周辺〈16〉

吉野作造の江原素六評

民本主義の提唱者であり大正デモクラシーの理論的指導者として知られる吉野作造は、江原素六の死に際し、腐敗隋落した金権政治家が幅をきかせ、江原のような清貧高潔な人物が政界の第一線から退いた形になっていた、当時の政治状況を鋭く批判した。

江原素六先生

去る五月二十二日、神田の青年會館に於て、故江原素六先生の告別式があつた。平素斯う云ふことには無精を極める私も、流石に此人にばかりは最後の別れを告げずには居れなかつた。往つて見ると、朝野各方面の有名無名の男女雲の如く集つて、皆無限の哀愁に閉されて居る。私は今更ながら先生の德澤聲望の厚きを想うて感慨無量なるものがあつた。

今日我國に於て吾人の尊敬に値する人物を算へよと云ふなら、固より一二にして足らない。けれど

も「先生」といふ言葉を最も眞面目な意味に使つて心から尊敬を捧げ得る底の先輩を探す段になると、我が江原先生の如きを外にしては餘り他にないと思ふ。眞に江原先生は淸くして溫かに強くして優みのある尊むべく慕ふべき一代の長者であつた。大正十一年の前半季は侯大隈を喪ひ公山縣を送つた。併し今わが江原先生と分るるに及んで、私達は始めて限りなき淋しさを感ずるのである。先生の長逝は日本の文化に取つて確に大なる損失である。

江原先生に就ての感想を書き列ねる段になると、そは際限もない仕事だ。私が玆に此一文を草するに到つたのは、讀者と共に故先生を偲ばんが爲ではない。先生の長逝を機として日本の政界の有樣を考へて觀、相共に反省警戒して我が國今後の進歩發展に貢獻せんが爲である。依て先生に就ての所感は之を他日に讓る。之より先生の長逝を機會に少しく日本の政界の事を論じて見よう。

先づはじめに一言して置くの必要あるは、何故私が江原先生の長逝を機として日本政界を論ずる考になつたかの點である。申す迄もなく、江原先生は立派な政治家であつた。教育にも宗教にも相當に盡されたが、最も多く半生の力を注いだ方面は確に政治であつたやうだ。屢々代議士にもなられた。最近は籍を政友會に置いた儘、貴族院議員に勅選せられた。斯くて先生の興味が政治に在つたことは疑なく、同時に先生はまた實際治政の才能のある人として許されても居た。麻布中學校長として又基督教青年會長としての功績から見ても、人を服するの器であつたことは爭ひ難い。從つて政治家としても本來相當手腕の人たるべきは明白であるが、どういふものか政界では表面の樞要の地位には立たれなかつた。政友會に於ても、黨中の長者として十二分の尊敬を受けては居られたが、其の地位は謂はば隱居の樣なもので、政機運用の實際には全然關係されなかつた。此處に私は圖らずも大に論ぜざる可らざる或るものを見出すのである。

卒然として政友會の幹部に向ひ、何故江原先生の如きを表面に活躍させぬかと問うたなら、彼等は恐らく其の問の餘りに當世らしからぬに暫くは呆然答ふる所を知らぬだらう。去つて之を假りに當の本人江原先生に尋ねたとする。先生も亦そんな事は自分の柄に應しくないことだと取り合はれないに相違ない。而して質問者もやがて江原先生は成る程政界の實際に活躍すべき柄の人でないと首肯して引き退るであらう。併し考へて見ると、政治と云ふものは、六千萬の民衆の運命を左右する大きな且つ高尙な仕事である。さう云ふ大切な仕事に何故江原先生の如き人が關係してわるいのか。否、先生の如き淸節高義の士をしてこそ殊に之に關係せしむべきではあるまいか。所が世間の實狀は、江原先生の樣な人の政治に關係するは不似合だとなつて居る。卽ち立派な人物の係はるべき仕事でないかの如くに見做されて居る。こゝに私達に取つて深く考ふべき問題があると思ふのである。

私はこの奇怪な現象に就て大に世人の注意と反省とを促したいと思ふのである。詳しい議論は他日にゆづり、之等の點に關する私の結論を個條書きにして見ると斯うなる。(一)政治は本來高尙なる仕事にして從て高尙なる人物の係はるに適するものなる事、(二)然るに我が國政界の現狀は、高尙なる人物の活躍に極めて不適當なる樣に組み立てられて居る、換言すれば、政界の組織運用が頗る非道德的に取扱はれて居る事、(三)而して斯かる現狀を打破し、政治と道德との關係を政治組織の上に整正して、立派な淸節の士も有效に且愉快に活躍の出來る樣にするは今日の急務なる事、是れである。

江原先生の長逝に際して、私は圖らずも我が國政界の道德的改造の急務をつく〴〵と感じさせられる。之は普選の斷行よりも、綱紀肅正よりも、政黨の革新よりも大切である。否、之等各般の改造の基礎的根柢を爲すものである。

吉野作造著

『講学余談』(一九二七年刊)より

シリーズ
沼津兵学校とその人材 ㉘

鈴木三郎から島田三郎へ

島田三郎（一八五一～一九二三）は、田口卯吉とともに沼津兵学校が生んだ代表的人物といえる。官僚・ジャーナリスト・政治家などとして彼が残した足跡は幅広く、日本近代史の要所要所に登場する重要人物である。

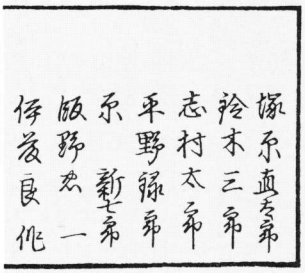
近年は、かつて刊行された全集や伝記が増補・復刻されたり、[1] 天皇の廃位を規定した進歩的な憲法草案「憲法草稿評林」の評注者が島田であったかなかったかをめぐって議論が戦わされるなど、[2] 研究者の注目を集めてもいる。

しかし明治初年の青少年期までの彼の経歴には不明な点が少なくない。ここでは沼津兵学校時代の島田について多少の知見を述べてみたい。

島田三郎
（望月宏充氏提供）

幕臣鈴木智英の三男に生まれた彼は、兵学校入学当時は鈴木三郎と称しており、明治二・三年の静岡藩職員録である『沼津御役人附』・『静岡御役人附』にも名前が掲載されている。資業生に及第したのは二年九月だった。

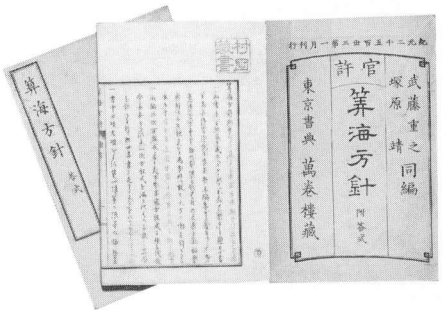
その他沼津時代の島田については、沼津城下の南方我入道村に下宿したこと（それが沼南という号の由来という）、途中沼津城本丸の寄宿寮に移ったこと、水泳が得意だったこと、乗馬訓練で落馬し頬に怪我をしたこと、生徒の中では最後までチョンマゲをしていたことなどが逸話的に知られる。



明治２年『沼津御役人付』に兵学校資業生のひとりとして掲載された「鈴木三郎」の名前

廃藩置県や兵学校の兵部省移管が行われる中、島田がいつ沼津を離れ上京したのかは明確でないが、明治四年十二月十五日付の勝海舟の日記に「立田革、沼津書生、**武藤三郎**、学費助力致すべく申し遣わす。」[3] とあることから、この頃まだ沼津にいたことがわかる。なお、この記事からは、当時鈴木姓から武藤姓に変っていたこと、勝に学費の援助を求めたらしいことが判明する。

その後上京した彼は、辻新次や江藤新平の家に寄寓し、五年一月大学南校に入学したがすぐ退学、十月には大蔵省翻訳局上級生徒になった。この時彼は**武藤重之**と名乗っていた。[4] 武藤重之の名では、六年一月に沼津兵学校での同級生塚原靖（渋柿園）との共編で『算海方針』という数学書を刊行したことが知られる。横浜の豪商島田豊寛の養子となり、**島田三郎**を名乗ったのは翌七年という。



明治6年1月刊 武藤重之・塚原靖編
『算海方針』

以上、島田三郎は明治初年、鈴木三郎、武藤三郎、武藤重之、島田三郎と、次々に名前を変えたことが明らかになった。

注

（1）『島田三郎全集』全7巻（一九八九年）、高橋昌郎『島田三郎伝』（一九八八年）。

（2）小西豊治『もう一つの天皇制構想』（一九八九年）、江村栄一校注『日本近代思想大系9 憲法構想』（一九八九年）、井上徹英『島田三郎と近代日本』（一九九一年）。

（3）勝部真長他編『勝海舟全集19』（一九七三年）。

（4）鈴木栄樹「開化政策と翻訳・洋学教育」『近代日本の政党と官僚』（一九九一年）。

お知らせ欄

◎『沼津市博物館紀要16』刊行の御案内

体裁：B5判　六七頁
頒価：一四〇〇円
内容：瀬川裕市郎「愛鷹山麓の旧石器時代遺跡の構造2」、樋口雄彦「史料紹介・入江功一述『滅亡の路より恩寵の路へ』」、同前「愛鷹牧余録」、上野裕二「明治初期における現沼津市域の小学校の位置について」。

◎沼津市明治史料館史料目録10・11刊行の御案内

10『岡宮区有文書目録』　B5判　二一一頁　二〇〇〇円
11『東沢田区有文書目録』　B5判　一〇四頁　一二〇〇円

◎ゴールデン・ウィーク中の開館

休館日：4月30日(木)、5月4日(月)、6日(水)
これ以外は開館します。

◎5月19日は無料開放日

江原素六の命日を記念し、5月19日は観覧料が無料になります。

◎明治史料館が小学校の教科書に登場しました。

この四月から小学校三年生が使用することになった社会科の教科書の中に、学校の近くにある市の施設のひとつとして明治史料館が取り上げられています。この教科書（学校図書発行）は、沼津市自体を題材にした内容になっています。

◎新館長の就任

3月31日・4月2日付の人事異動により、館長長嶋民夫は退職し、後任には石原廣吉（前清水町立清水中学校長）が就任致しました。今後とも変わらぬ御支援をお願い申し上げます。

◎平成三年度調査来館者抄録

8・3　静岡県史近現代部会
8・29　沼津市史中世部会
9・3　静岡県史近現代部会
9・4　同右
9・22　駒沢大学大久保俊昭氏他
10・20　東京大学伊藤隆氏他
11・26　修善寺町美術館準備室
12・12　防衛庁防衛研究所原剛氏
12・25　菱沼良平氏（沼津兵学校教授間宮信行子孫）
2・19　仏教大学久木幸男氏
3・12　静岡県史近現代部会
3・17　静岡県史近世部会
3・26　麻布学園百年史編纂委員会
3・27　同右、静岡県史近世部会

明治維新史学会第21回大会へどうぞ

明治維新史学会は、全国の研究者約120名から組織された学会です。今回その大会が当館講座室を会場に沼津で開催されることになりました。研究発表や講演は、会員以外に一般からの参加も歓迎していますので、どうぞお気軽にお出掛け下さい。

6月6日(土)

研究発表　13:00～17:00

国　雄行氏（神奈川県立博物館）「内国勧業博覧会の『内国』の意味について」
山田博雄氏（中央大学大学院）「中江兆民とルソー　―『民約訳解』をめぐって―」
田村貞雄氏（静岡大学教授）「佐賀の乱と山口県の情勢」
福井　淳氏（明治大学大学史編纂室）「『明治十四年の政変』を考える」

6月7日(日)

研究発表　9:30～10:40

斎藤　新氏（浜松市博物館）「弘化三年一揆と浜松井上藩の支配のあり方」

明治史料館見学　10:50～12:20

総　会　14:00～15:00

講　演　15:00～16:30

田中　彰氏（札幌学院大学教授）「岩倉使節団をめぐる諸問題」

沼津市明治史料館通信　第29号
編集　発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂三七二―一
電　話　〇五五九―二三―二三三五
FAX　〇五五九―二五―二〇一八